

プロムナード



ホームページ URL : <https://yokoso.or.jp>

〒225-0025 横浜市青葉区鉄町 2201-5

発行人：岩坪 新

045(902)0001[代]

『桃田副院長・看護部長の
ご逝去を悼んで』

当院の副院長、桃田寿津代看護部長が4月28日の朝、ご自宅で急逝されました。最近歩行時に息切れなどがありやや体調もすぐれないご様子だったので心配はしていたものの、前日は非常にお元気な状態だっただけに報告を聞いた職員は皆、呆然という状況でした。桃田看護部長は享年76歳であり、年齢的には名誉職の立場のほうですが、33年間看護部長として更に平成17年に緑成会の理事に就任、平成18年10月からは副院長として第一線に立ち当院の発展に寄与されました。また院外においては日本看護副院長連絡協議会の会長、神奈川県看護部長会の会長そして神奈川県看護（政治）連盟の副会長として、神奈川県内に留まらず全国区で活躍され、看護職の地位向上と発展のために多くの公職の方々とも連携を深めてこられました。人との繋がりを大事にされ、各種の会合には必ず出席され、院内には玄関の入り口に立ち、患者さん

一人一人に声をかけていた姿は、多くの患者さんや職員の脳裏に焼き付いていることと思います。桃田副院長の年齢と体調を考え、勇退の時期を検討していましたが「自分が立ち止まる時は死ぬ時よ」とご家族にお話しされていたようで、まさに生涯現役を貫かれた姿勢には敬服せざるをえません。地域を大切に人との出合いを大切に、そして看護を愛する思いが人一倍強かった桃田看護部長が残された軌跡は改めてとても大きなものだったと感じております。今、当院は大きな支柱を失いました。しかし悲しんで立ち止まっている訳にはいきません。桃田看護部長の教えを全職員が胸に抱き、人を大切に地域医療に貢献していくことが、桃田看護部長のご労苦に報いることであり、天上から叱咤激励の音が聞こえてくる気がします。桃田看護部長が生前賜りましたご厚情に感謝御礼申し上げます。もと今後とも横浜総合病院をよろしくお願ひいたします。（合掌）

（院長 平元 周）

訃報

副院長兼看護部長

桃田 寿津代 儀 (享年76歳)

平成三十年四月二十八日

永眠いたしました。

ここに生前のご厚誼を深謝し、
謹んでご通知申し上げます。



『桃田看護部長への思い』

—ご逝去を悼み—

桃田看護部長が、ご逝去されて早いものでひとつきが過ぎました。看護の道一筋に人生を捧げ、当院のため、看護師の地位向上のため精力的に取り組んで来られました。私達が、働きやすい環境で看護を続けられるのも桃田看護部長のおかげだと感謝しております。

生前は「人生は百歳、私は頑張るわよ」と口癖のようにおっしゃっていました。本当に百歳まで、看護の道を全うされるものと思っておりましたが、道半ばで、ご逝去され、さぞ心残りではなかったかと残念でなりません。

桃田看護部長は、私達にとって大きな舟のような存在でした。荒波に揉まれ沈みそうになった時や進む方向がずれそうになった時は、舵を取って軌道修正し、私達を守り導いてくださいました。それゆえ突然の訃報を耳にした時は、魂が抜けたように放心状態となり、一生忘れる

ことのできない日となってしまいました。

悲しみの癒えないまま無情にも時は過ぎ、通う道の木々の青葉に初夏を感じる季節となりました。「青葉さへ 見れば心のとまるかな 散りにし花の名残と思えば」山家集に載っている西行の短歌です。桜をこよなく愛する西行の気持ちと、桃田看護部長の看護を深く愛する気持ちとが重なりました。「青葉が来年も美しい桜を咲かせるように、未来に対して希望をもつこと、そのためには今日を大切に過ごしていくなさい」と部長の声が聞こえてきます。

患者様お一人おひとりのためそして、この病院を支えて下さる地域の方々のために、信頼される看護をしていくことが、私達の使命と考えています。

看護部を代表し、桃田看護部長のこれまでの導きに感謝しつつ筆を置きます。



(若木 新子)

『当院で取り扱う脳神経疾患

～脳卒中、頸動脈狭窄症について～』

脳神経疾患で多い疾患として脳卒中があります。その中には、脳の血管が閉塞することで生じる脳梗塞、脳を栄養する穿通枝という細い血管が切れることで脳実質内に出血を生じる脳出血、脳動脈瘤という血管のコブが破裂し、多量の出血をきたしてしまうくも膜下出血等が含まれます。

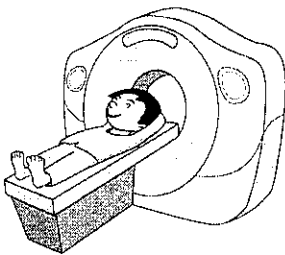
我が国でも高齢化が加速しており、また食生活の欧米化にも伴い、今後ますます動脈硬化に関連する脳卒中は増加することが予想されます。脳卒中の重症度は患者様によって様々ですが、一旦発症しただけで永続的な後遺症が残存する可能性が高いことから、積極的に発症を予防すること、そして「呂律が急に回らなくなった」、「突然片方の手足が動かない」といった症状をきたした場合にはすぐに病院を受診することが重要です。

脳卒中の予防法として、動脈硬化を予防することは大変重要です。高血圧、高

脂血症、糖尿病のような生活習慣病の有無について健診等を通じてしっかりと把握し、そしてそれらの疾患が見つかった場合、放置したりせずには内科の先生の診察を受け、必要であれば治療を受けることが重要です。また、それらの疾患を治療中である場合、自分にどの程度、動脈硬化が存在するのかを知ることが脳卒中を予防する上で有用です。頭部MRI検査を行うことで、脳の断面図、また脳を栄養する太い血管の状態を見て、動脈硬化の度合いを把握することが出来ますし、くも膜下出血の原因となる脳動脈瘤も同定することが出来ます。また、頸動脈という喉仏の両脇辺りで拍動している血管は脳を栄養する大事な血管です。皮膚表面に機械を当てる頸動脈超音波検査を行うことで、血管の壁に付着するプラークというゴミや血管がどれだけ細くなってしまうているか診ることが出来ます。頸動脈の狭窄が進行すると、目や脳への血流が滞る為、数分の間、目の前が真っ暗になる一過性黒内障や、手足に数分力が入らなくなる、一過性脳虚血発作が生じ

ます。いずれの症状も、脳梗塞の前触れ症状とされており、数日以内に脳梗塞を起こす可能性が高い状態ですので、すぐに医療機関に受診して下さい。以上のことから、生活習慣病をお持ちの患者様は脳ドックなどで一度MRI検査や頸動脈超音波検査を受けることをおすすめします。頸動脈が細くなる頸動脈狭窄症については、その狭窄の度合いに応じて、投薬もしくは手術が検討されますが、当科では皮膚を切開して行う頸動脈内膜剥離術、またカテーテルによって治療を行う頸動脈ステント留置術を患者様の状態に合わせて行っております。他院にて頸動脈が細いと言われたことがある場合には当科へ一度ご相談下さい。

(脳神経外科 石井 匡)



『介護老人保健施設の

リハビリテーションについて』

—在宅へ。この動きは、いまや医療・介護の共通の流れになりつつあります。介護老人保健施設（以下老健）とは、病院と自宅の中間施設として位置づけられており、「家に帰るための準備をする」施設になります。専門スタッフによる支援を通じて、患者様が在宅復帰することを目的としています。

緑成会グループの横浜シルバープラザも在宅復帰に力を入れている施設のひとつです。他職種が意見を出し合い、患者様の在宅復帰、患者様や家族のQOL（生活の質）の向上に向けて、チームで支援しています。老健のリハビリテーション（以下リハビリ）は、入所から3ヶ月間は1日20分程度を週6回実施します。さらに、認知症がある方で、生活機能の改善が見込まれると判断された場合は、週3回のリハビリが加わります。入所から3ヶ月以降は、週3回程度のリハビリを実施します。また、入所前後に患者様の自宅に

訪問し、自宅の様子を確認します。これによって、入所当初から自宅の生活をイメージしてリハビリを実施することができ、退所が近づく、入居者ご本人と専門スタッフが自宅を訪問し、生活動作の確認を行い、患者様が安全に自宅で生活できる環境を整えていきます。

「在宅復帰」と一言で言いますが、在宅生活では、食事や排泄など毎日繰り返される日常生活動作がいかに行えるかが、家族の負担を左右します。老健は、治療から落ち着いた後の「生活」を基本にしている、訓練室の中だけの練習だけではなく、生活の場でのリハビリが重要になり、「生活」の中で繰り返される日常生活動作がひとつのリハビリになります。そのため、リハビリ職種は患者様のできる動作を把握し、「生活の場」に繋げなければなりません。ただそれは、リハビリ職種が行う練習だけでは把握しきれないため、介護職と連携して行う必要があります。認知症のある患者様も同様です。認知症の方に対するリハビリとは、認知機能が正常な状態に回復するということ

ではありません。認知症の方にとって苦手である「新しいことを覚えること」や「日付や場所が分からない」などの症状から生じる失敗や不安を軽減することが重要になります。リハビリ職種は、今出ていること（残存能力）を把握し、今ある能力を活かし、自分らしく暮らせるよう生活の場に繋げ、在宅復帰を支援する必要があります。

想像してみてください。仕事に行ったり、遊びに行ったり、家から離れて過ごす時間があっても、数か月に渡って家を離れることは少ないです。家に帰り、家族がいる空間に戻ると“ホッと”感覚があると思います。私自身、入居者にもその感覚を取り戻す手助けができるよう、また継続できるよう、努力していきたいと思っています。

（リハビリテーション科 K・S）



『病院への10年越しの想い』

感謝を心に込めて』

1月から入職してお世話になってい
ます。不安も多かったですが、患者さん、
病院スタッフとの関わりの中でようやく
この病院に少しずつ慣れてきました。私
はずっと病院で働きたい、患者さんのた
めに、病院（スタッフ）のために、自分
のできることを見つけたいという気持ち
で目標に向かって生きてきたので、その
夢を叶えられるチャンスを受けたことを
とても感謝しております。私は生まれ
たときに低酸素脳症となり両下肢に障がい
を持って、26年間生きています。出身地
は北海道の道南にある浦河という町で競
走馬と海と山に囲まれた自然豊かな場所
で育ちました。子どもの時から、足の手
術やリハビリを入院生活で経験し、病院
がとても身近な存在で、その時の印象が
強く残っています。そんな私が、病院で
働きたいと思ったのは今から10年前の
出来事がきっかけでした。当時、高校生
だった私は足を疲労骨折して歩けなくな

り、地元の病院に入院しました。病院で
は毎日、笑顔で話しかけてくれる人、自
分の間違いを叱ってくれる人、涙を流し
た時は心から寄り添ってくれた人がいて、
私はそんな人生の先輩方や同世代の何で
も話せる人たちに囲まれて生活していま
した。しかし、骨折が治ってきても、昔
のように歩くことができなくなり、体力
も落ちてしまいました。入院が延び、病
院の隣にあった学校へ車いすで通つても
よいと許可がおり、毎日友人が病院から
高校まで車椅子を押して連れて行つてく
れました。しかし、階段を上れなくて、
高校を転校しなくてはならない事態とな
り、夜ひとり、病院のベッドで涙を流し
ていた時、大好きだった看護師さんがこ
んな言葉でエールをくれました。「私は信
じてるからね！階段を上りきって、きつ
と学校に戻るよ！階段上れる日がきた
ら、私に最初に見せて！そして一緒に写
真撮ろうね！」大好きな人が医療従事者
だったこともあり、私はそれを励みに階
段を上れるまで体力と運動能力を毎日
のリハビリで回復させて、退院して地元

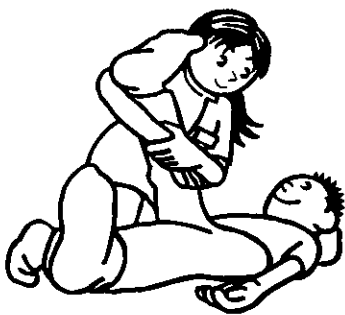
高校に復帰できました。その時の出来事
が強く印象に残り、大好きな人のエール
がずっと自分の心に刻まれて、病院で働
きたいという気持ちになりました。

あの時に諦めないで毎日リハビリを続
けたこと、患者さんや病院スタッフと毎
日楽しく過ごした日々が、かけがえのな
い思い出であり、自分にとっての医療福
祉の世界を目指した原点なのです。

病院で働くことは私の“生きがい”の
一つです。

自分が横浜総合病院でどんな活躍がで
きるかを一生懸命考えて、患者さんの気
持ちや病院スタッフの気持ちに寄り添っ
て、笑顔で接していけたらと思います。

(リハビリテーション科 N・T)



『高齢者と自動車運転』

近年、高齢化社会に伴い脳卒中・脳外傷者や認知症患者が増え、自動車事故による死亡者数も増加傾向にあると言われています。75歳以上の運転者の死亡事故件数は、75歳未満の運転者と比較して免許人口10万人当たりの件数が2倍以上多く発生しており、テレビでも高齢者の自動車運転事故のニュースは後を絶たず、皆様の記憶にも残っているのではないのでしょうか。

平成26年に改正された道路交通法では、運転免許の更新時に健康状態について公安委員会に申告することが義務化されました。対象となる病気は幅広く、虚偽の申告をした場合、罰則も設けられています。また、平成29年度の改正では、認知症などに対する対策も強化され、更新時や違反をした際に行われる認知機能検査で「認知症の恐れがある」と判定された方は、主治医などの診断書を提出しなければなりません。認知症と判断された場合は運転免許の取り消しまたは停止

となります。当院では、認知症の診断は物忘れ外来にて実施しております。脳卒中罹患後においても同様、運転再開時には医師の診断書が必要です。脳卒中後の自動車運転においては、当院では作業療法士が自動車を運転する際に重要であるとされる注意力、視空間認知能力など自動車運転の判断に特化した神経心理学的検査を行い、その結果を基に医師が総合的に判断し診断書を作成しております。

近年、高齢ドライバーによる交通事故の増加から、運転免許を自主的に返納する高齢者も年々増加しています。神奈川県では「神奈川県高齢者運転免許自主返納サポート協議会」が発足され、運転免許証を自主的に返納すると、運転経歴証明書が交付が受けられます。それを同サポート協議会の加盟企業等に提示すると、購入商品の割引や自宅までの無料配達、宿泊料金等施設利用料金の割引などの特典が受けられます。また当院では、高齢者の移動手段を確保する横浜市の新たな取り組み「地域貢献送迎バスモデル事業」への協力を決めました。当院の患者様向

けの送迎バスの空席を利用し、高齢者の日常の移動手段に活用するというものです。詳しくは横浜市道路局企画課交通計画担当まで）

自動車を運転するということは、ただの移動手段としての役割だけでなく「生活の楽しみ」「いきがい」ともいえます。しかし、判断力や運転能力の衰えは思わぬ事故を引き起こし、生活が一変することも考えられます。ハンドルを握ることに不安を感じた時や、自分の家族の運転に不安を感じた時は、免許の自主返納を検討してみてもいいかもしれません。また、早いうちから家族で話し合っておくことも大切なのではないでしょうか。

(リハビリテーション科 R・S)



Dr・プロフィール

内科

佐々木 要輔
ささき ようすけ



★出身学校

聖マリアンナ医科大学(平成22年卒)

★研究及び臨床

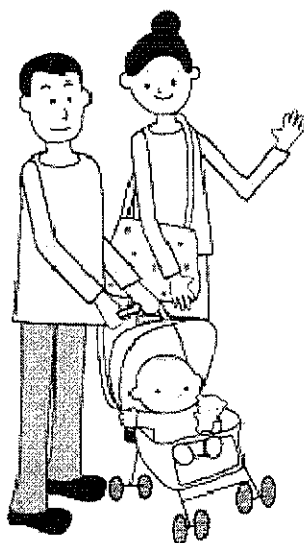
糖尿病や内分泌疾患を専門とし、食事療法や内分泌疾患の診断法に関する研究をしています。

★趣味

我が子の育児。特にベビーカーでの散歩やチャイルドシートに乗車してのドライブはどこに行くにも楽しそうので父親冥利に尽きます。

★診療に際して心掛けている事

快方に向けてきちんと指導および治療を行うのはもちろんのこと、せつかく長時間待つて頂いた患者さんのため、短い外来時間でもなんとか「一笑い」して帰って頂く外来にしています。



病院からのお願い

敷地内禁煙のお願い

当院では、敷地内(駐車場も含む)は全面禁煙となっております。院内には喫煙所等はございませんのでご了承下さい。マナーをお守りいただき、全面禁煙にご理解とご協力の程、お願い申し上げます。

ご来院の皆さまへ

横浜総合病院正面入口での

右折入庫・道路の横断

は危険です。ご遠慮下さい。

・近隣住民の方々へご迷惑がかかります。

・渋滞、事故の誘発を招きます。

皆さまのご協力をお願い申し上げます。

忘れ物について

最近、忘れ物が多くなっています。常に、持ち物のご確認をお願いします。



『経験から学ぶ』

私が理学療法士になってから1年と少しが経ちました。今年の春で2年目となり、後輩も入職してきたことで、先輩になったことへの嬉しい気持ちと焦る気持ちと半々です。2年目になった今、新人だった去年の自分より、成長しなければ！と何かに追いかけている気がします。

北海道大学教授の松尾睦先生は、「経験から学ぶ力」について研究されています。経験から学ぶ力のある人とならない人との違いとは何なのか？何となく分かるようで説明しづらいテーマです。

松尾先生によると、「経験から学ぶ力」とは、「適切な「思い」と「つながり」を大切に、「挑戦的な目標に取り組み姿勢」「自分の仕事のあり方を振り返る」「仕事の中にやりがいや意義を見つめる」ことを心掛け仕事をする事」とされています。特に「思い」と「つながり」の重要性を訴えていて、「思い」とは、仕事をやる上での大事にしている価値観や考え

方で、「つながり」は他者との関係性を意味するそうです。

つまり簡単に言うると、適切な思いと他者とのつながりを大切に「挑戦して、反省して、楽しんで」仕事に取り組みもうという事でしょうか。言われてみると、なんだ、そんなの全部当たり前のことじゃないかと思えます。しかし、今の自分が成長しなければ！と、ひたすら焦っているということは、これらの当たり前のことが満足に実行できていないからでは？と、ふと考えさせられます。さらに、当たり前のことを当たり前に実践する難しさにも気付きました。

理学療法をする上での主役は患者さんになります。だからこそ、患者さんのために、自分のために、当たり前のことを当たり前に実践して、経験から学ぶ力を身に付け、成長していきたいと思えます。

(リハビリテーション科 Y・H)

第122回 生活習慣病教室のお知らせ

・ 6月16日(土)午後2時～3時30分

・ 会場 当院1階 集会室

・ 講演1 嚥下(えんげ)障害をふせぐには

・ 講師 耳鼻咽喉科部長 田中泰彦 医師

・ 講演2 閉塞性睡眠時無呼吸症候群の検査

・ 講師 検査科

参加をご希望の方は、総合受付にお申込下さい。(参加費用 200円)

(次回は7月21日を予定しております)

イベントのお知らせ

・ 6月16日(土)午後2時～

・ 会場 当院 正面玄関前

あじさいコンサートを開催致します。

桐蔭学生によるコンサートとなります。

是非、ご覧下さい。

※コンサート開催中は正面玄関を閉鎖します。ご来院の方は救急外来からお回り下さい。

編集後記

雨季の季節となりました。

蒸し暑い日が続きますが、蒸し暑いからといって油断せず、薄着は控えめにしましょう。

編集委員 リハビリテーション科